

学校の授業を、家庭でも！

国語の授業って、実は、こうやってできてます！ 第1号

(1) 家庭でできない？ 国語の学習！

休校中は、学校から課題が配付され、家庭で学習を進める形になっています。でも、難しいですね。保護者の方からは、

- ・「私たち親が教える場合、国語ってどこがポイントなのかが不明。」
- ・「教科書を読んで主人公の気持ちを考えたりするのって当時よくやったなあ。そういうのって、今の子どもたちもやった方がいいの？」

といったような声が聞こえてきます。

確かに、算数のたし算やひき算などの**計算技能や漢字の学習**などは、経験をもとに保護者のみなさんが教えることができるでしょう。

でも、国語の学習って、そうはいかないですね。子どもが教科書をただ読んだり、保護者が読み聞かせをしたりすればよいというわけではなさそうですね。

学校では、文部科学省が出している「**学習指導要領**」に基づいて、授業が展開されています。「何を教えるか」については、すべて学習指導要領に書かれています。

でも、学習指導要領に書かれている内容は、専門用語も並んでいて、ちょっと難しいかもしれません。今回は、国語の学習の中でも、家庭で一番学習しにくいであろう「読むこと」について、**家庭でもできるポイント**をお伝えします。あくまでも一つの視点であり、絶対的なものではありません。

「家庭でできる国語の学習～読むこと～」

(2) 何のために読む力を育てるの？

例えば、大人が、文学作品を読む目的は何でしょうか。読書が好きで、暇さえあれば好きなジャンルの小説を読むという人もいるでしょう。読むことは苦手だけれど、映画をよく観るとい人もいるでしょう。このように、**大人は、余暇を楽しむときに文学作品と触れ合うことがよくあります。**

では、なぜ人は小説を読んだり、映画を観たりするのでしょうか。一つには、**日常ではありえない出来事も、作品を通して、登場人物に同化することにより、疑似的に体験できる**ということが考えられます。

事件を解決する探偵ドラマやアニメを思い出してください。事件のきっかけがあり、解決に必要な伏線がかけられています。事件が解決する場面（クライマックス）では、かけられた伏線が再度登場し、すべてがつながることで解決に至ります。そして、事件解決後の様子を見ることで、観ている人には、スッキリ感が残ります。

次に、恋愛ドラマを思い描いてみてください。非日常的な出来事の世界に、主演の俳優さんを介して入り込み、共感しながら、疑似的に恋愛を体験することができます。その世界が、たとえ現実的なものでなくてもです。むしろ、現実的でないからこそ、楽しめるのかもしれませんが。

国語の「読むこと」の学習では、**こうした事件を解決する探偵ドラマや恋愛ドラマを楽しむ力を育てることだと考えてみてはどうでしょうか。**

ちなみに、「悲しい気持ちの場面の多くは雨が降っている」「犯人を追い詰める場面の多くは、崖である」というものも、登場人物の心情を場面の様子に表す作者のしかけの一種になっています(こういうのを「情景描写」と言います)。そういう見方をしていくのも、文学作品の楽しみ方の一つかもしれませんね。

今回は、ひとまず、ここまで。

次回は、さらに詳しく、家庭での国語学習の話が続けますね。

ありがとうございました。